



## 12月のコラム ～ それは常識なのかな？

先日受講したセミナーで印象に残った言葉がありました。高度成長期から失われた30年までを労働経済という視点で振り返る中で聞いた「これは常識ではなく日本独特のもです」。自営業社会から雇用社会へ移行し、女性が自営業・家族従事者から専業主婦（無業）になり、それに合わせて税制や社会保険制度において家族的配慮を導入したこと。実態とそぐわないままに未だにこの標準世帯モデルが使用されていますが、経緯については必然だったのだろうと常識のように捉えていました。でも、今まさに高度経済成長の真ただ中にある国で専業主婦が生れているかと言えばそんなことはなく、夫婦で働き、家事は分担、食事は外食が当たり前という国もあります。常識でなく、ただの経済施策で生まれたものだったのですね。

常識って何だろうと頭にクエスチョンが残っていたとき、日経で「老いても推し活 趣味や嗜好「消齡化」で縮む年齢差」という記事を読みました。「価値観や嗜好で世代間の差が小さくなる『消齡化』が起きている」。というのです。

博報堂生活総合研究所の調査によると、例えば「ハンバーグ好き」の割合は02年に20代後半が約61%だったのに対し、60代は約20%。それが、22年には両世代の差が約20ポイントに縮小。「夫婦はどんなことがあっても離婚しない方がいい」と考える人の割合については、20代後半と60代の差は、02年に18ポイントだったのが、22年には、たった4ポイントにまで縮小しています。

同記事では、「消齡化の背景のひとつに、ライフステージと年齢がリンクしなくなっていることがある。1975年に25歳で第1子を出産する女性は16%だったが、2020年はピークの29歳でも1割に満たない。40代で初めて結婚する人もいれば、出産する人もいて、孫に囲まれる人もいるのがこれからの当たり前だ」とあります。

確かに「年齢による当たり前」ってなくなってきていますよね。「消齡化」という言葉も初めて知ったのですが、価値観や常識って時代につくられてきたものなんだとあらためて思います。多様化が進む中、女性だから、男性だから、もう歳だから、親だからそんな常識には囚われず、自分の原点に忠実に、自由でありたいものです。

2023年12月 水田かほる